保育者の「結婚観・子育て観」がキャリア形成プロセスに与える影響

－結婚と子育てへの意識が生み出す保育者の離職と再就職

＊香曽我部　　琢

Study on carrier formation of Kindergarten Teacher：Focus on marriage, raising children

KOSOKABE　Taku

要　旨

本研究では、「子育てをしながら保育者に再就職する」経験を持つ保育者の経験・出来事に着目し、高校生からその経験に至るまでのプロセスを明らかにし、保育者のキャリア形成の在り方について検討を行う。具体的には、複線径路・等至性モデリングを用いて、そのプロセスを明らかにし、そこから得られた知見をもとにキャリア形成の新たな視座を得ようと考えた。その結果、（ⅰ）結婚することによって生じる状況の変化に対して、自らのキャリアを変えることによって適応しようとするために「離職」が促進される。（ⅱ）子どもがある程度大きくなって手が離れ来る際に生起する「子育ての一段落感」が「再就職」を促進させる。以上、２点が明らかにされた。

Key words：保育者，キャリア形成，離職，複数径路・等至性モデリング，再就職

１．問題と状況

キャリア教育の重要性

文部科学省（2000）によると、地球規模の情報技術革新と社会経済・産業的環境の国際化がキャリア教育の重要性が高まった要因であると示されている。とくに、技術革新によってより高次な機能をもったAIの出現は、人に求められる職業選択の幅をせばめ、人にとって代わる存在として多くのメディアに取り上げられている。さらに、AIは人の職業選択の幅を狭めることによって、人に求められ職業に関するスキルに関するパラダイム転換も社会に強要する。例えば、一般的な事務をこなすOLやトラックの運転手などに求められる事務処理力や運転などの一般的な能力しかもちいない「フィジカル系・リソース系のRoutine Work」は、現代社会で求められるスキルとして認識されない。その一方で、芸術家や教師など、独創的な発想や対人援助に関する濃密な他者との相互作用などの能力を用いる「サービス系Routine Work」や「Creativity Work」が専門職のスキルとして高く評価される時代がすでに来ていることが示唆されている。

キャリア教育の基本的方向性

「10年後には今ある仕事（職業）の半分がなくなる」と言われ、産業構造や就業構造の流動性が高い現代－未来において、将来の自らの職業について思いを抱き、その思いをかなえる努力を積み重ねることはとても有益であると考えられてきた。そのため、さまざまな職業に関する情報については高等学校のみならず、中学校や小学校においても提供されるようになり、キャリア教育を系統的に提供する施策が図られてきた（中央教育審議会，2011）。

中教審答申では、学校教育におけるキャリア教育の基本的方向性として、３つの方向性を示したが、とくに、基礎的・汎用的能力を確実に育成することの重要性について示唆し、とくにそれらの力が実践的・体験的な活動によって促される必要があることを明示している。

＊　宮城教育大学　教育学部　家庭科教育講座

保育領域におけるキャリア形成

峯村（2017）は、基礎的・汎用的能力について、とくに「自己理解・自己管理能力」に着目し、自己やアイデンティティの形成に極めて類似した内容が含まれていることを示した上で、「自己の文脈の中で、自分が何をしたいのか、といったことを自分で理解し、そして今後のために更に学ぼうとする主体的な力」であると示唆している。

キャリア教育の文脈では、自分が何をしたいのか、自らを理解することが重視されていることが示されたが、実際には大学１年次時においても将来「自分が何をしたいのか」が明確ではない学生が30％程度存在することが調査によって示されている（Benesse 教育研究開発センター，2005）。また、神谷（2010）は、保育者養成校への進学動機・進学理由において、自分から進学を決めるのではなく、他者の働きかけによって他成的に動機を形成している群や、他に進路先が見つからずに保育者養成校に進学する消極進学群が存在することを示している。つまり、保育者の職業領域においても、「なんとなく」流されて保育者になる層が存在することが想定されるのである。

一方で、神谷（2010）は自らの経験をもとに自ら保育者になろうとする群や、積極的に保育者になろうとする積極進学群が存在することを示しており、その志望理由は多様であることが示されている。この志望動機の多様性については、長谷川（2006）が５つの因子を示し、大村（2011）は２因子構造であることを示しており、他にも保育者の志望動機に関する先行研究の知見はさまざまで、保育者の志望動機を読み解くことの困難さを示唆している。

保育者のライフイベントへの意識と離職

保育者を志望する大きな動機の一つに「子どもが好き」がある。ゆえに、保育者を希望する学生のほとんどは、将来的に自らも結婚し、出産して、子どもを育てることについて肯定的であり、そのようなライフを学生のころから思い描いていることが示されている（金子）。また、保育者の離職理由の要因の一つに「結婚」、「出産」、「育児」がある。そもそも、学生のころから「子どもが好き」で、自分の子どもを自分で育てたいと思っている保育者にとって、「結婚」や「出産」、「育児」は離職のトリガーとなる経験・出来事であるのは当然のことで想像しやすい。

２．研究目的

保育者不足が社会問題となっている現代において、「結婚」や「出産」、「育児」を大切に思う保育者が自らの「結婚」、「出産」、「育児」の経験・出来事と向きあうなかで、どのように生きるのか、そのライフを明らかにすることは、保育者の離職の要因を明らかにする上で有効である。

そこで、本研究では、「子育てしながら保育者として再就職する」までの経験・出来事のプロセスを明らかにすることで、保育者にとって「結婚」、「出産」、「育児」などのライフイベントが保育者のキャリア形成にどのような影響を与えるのかを明示する。さらに、その知見をもとに、保育士不足解消のための新たな視座について検討を行う。

３．研究方法

分析方法の選定について

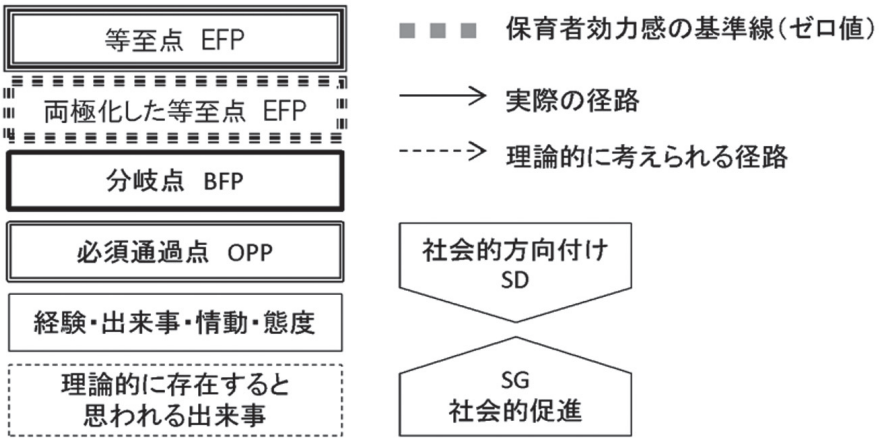
複線径路・等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling; 以下 TEM）とは、ヴァルシナー（Valsiner, 2001）が、発達心理学・文化心理学的な観点に等至性（Equifinaly）概念と複線経路（Trajectory）概念を取り入れようと創案したものである。特徴として、人間の成長を開放システムとして捉えることで、人が他者や自分を取り巻く社会的な状況に応じて異なる経路を選択し、多様な経路をたどりながら（複線径路概念）も、類似した経験や出来事にたどり着くという概念（等至性概念）を用いて、人間の成長のプロセスの多様性を記述しようとした方法論的枠組みである（安田, 2015）。

本研究では、「子育てしながら保育者として再就職する」経験を等至点として設定した。また、「必須通過点」や「分岐点」において、キャリア選択において意思決定が必要となった経験と出来事における他者や社会から受けた社会的助勢（SG）・社会的方向づけ（SD）に焦点を当て TEM 図として分析を行う。TEM 用語と図式については Figure3を参照。

サンプリングの選定と手続きについて

また、データのサンプリングについては、複線径路・等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach）において、TEM と発生の三層モデル

Figure 1　TEM 用語と図式



（Three Lyerd Model of genesis）を用いる際の理論的サンプリング法として位置づけられている歴史的構造化ご招待（Historictual structured Inviting: 以下 HSI）を用いることとした。HSI では、等至点に設定した経験・出来事を実際に経験した方を招いてお話しをお聞きする点に特徴がある。本研究では、等至点として設定した「子育てしながら保育者として再就職する」経験を持つ保育者２名を研究協力者とした。

具体的には、(1) 養成校を卒業して、保育者になるまで , (2) 保育者として勤務しはじめてから離職するまで、(3) 離職してから再就職するまで、(4) 再就職してからの4つの段階に分けて、(a) 自らの結婚観、(b) 出産への意識、(c) 子育て観の３つの項目について半構造化インタビューを実施した。サトウ（2015）は、インタビューについて、３回のインタビュー（トランスビュー）を推奨している。そこで、本研究では３回のインタビューを実施した。また、回数だけでなく研究者が作成した TEM 図を共有化するトランスビューの必要性が示されているために、２回目、３回目のインタビューでは協力者とともに、前回データをもとに作成した TEM 図を精査しつつ共有化を行うトランビューを実施した。

４．結果と考察

本研究では、サンプリングした２名のデータをもとに TEM 用語を Figure 1 のように図形化して定義づけした。当初、２名のデータを統合して TEM 図を構成しようと考えていたが、実際に分析を進めていくと、保育者 A と保育者 B はともに等至点「子育てしながら保育者として再就職する経験」を持つものの、結婚後に生活する場が異なる都市に移動することが求められたために、離職せざるを得なかった保育者 A と、結婚・離職後も勤務園と同じ都市に住み続けた保育者 B では社会的な状況が大きく異なるため、TEM 図を統合することが難しいと判断した。そのため、この二人の TEM 図については、一つずつ丁寧に論述しつつ、さらに比較することで共通点やその差異を手がかりに考察を深めていきたい。

ｉ期：保育者の結婚と離職

【保育者 A の場合】

保育者 A と保育者 B の大きな違いの一つに、「SG 結婚相手の異動」があげられる。この状況の変化が保育者 A を離職へと大きく促している。そもそも、「結婚相手との出会い」は養成校に在校していた時期からで、付き合いがつづいていた。結婚相手とは同学年であったために、就職してから研修が修了する1年後には、相手が全国のどこかに異動することは、公立の保育園に採用試験を受けたころからなんとなく理解はしていた。そして、実際に「区立保育園への勤務」がはじめると仕事の楽しさを感じつつも、保育者 A は年度末が近づくにつれて「Tb1. 結婚を意識し始める」。結婚への思いが強まる一方で、仕事をすることの充実感も強く感じてはいたが、このときには、公立の採用試験に受かったという自信もあり、出産や子育てが一段落つけば、何時でも働けると考えていた。両親に相談すると「公務員になったのにもったいない」と言

Figure 2　TEM 図保護者 A

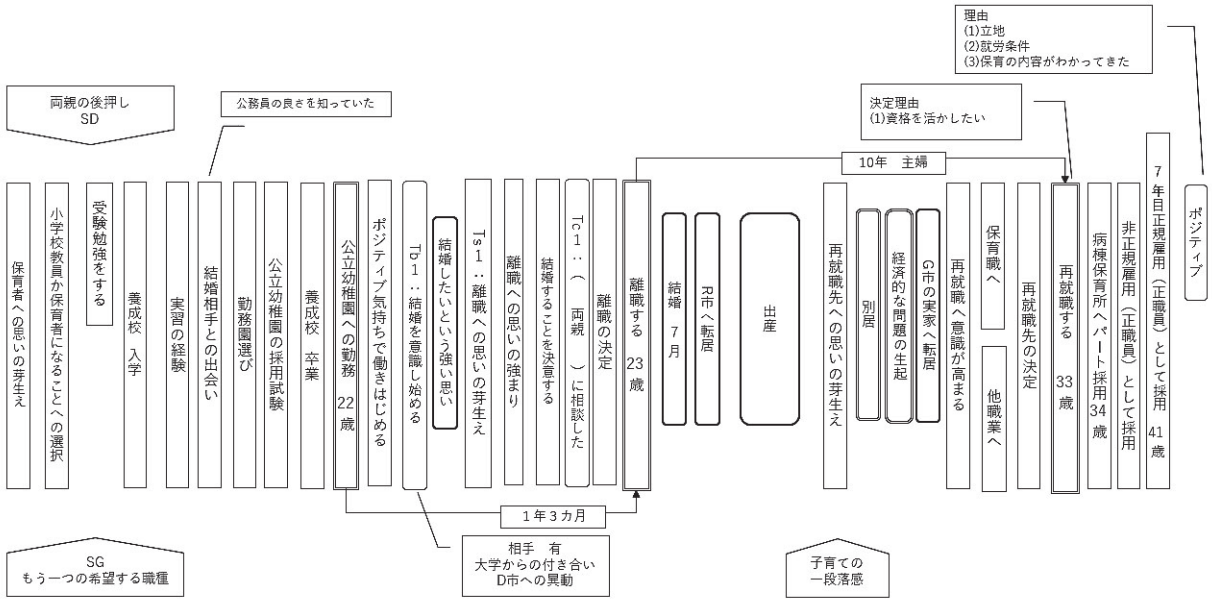
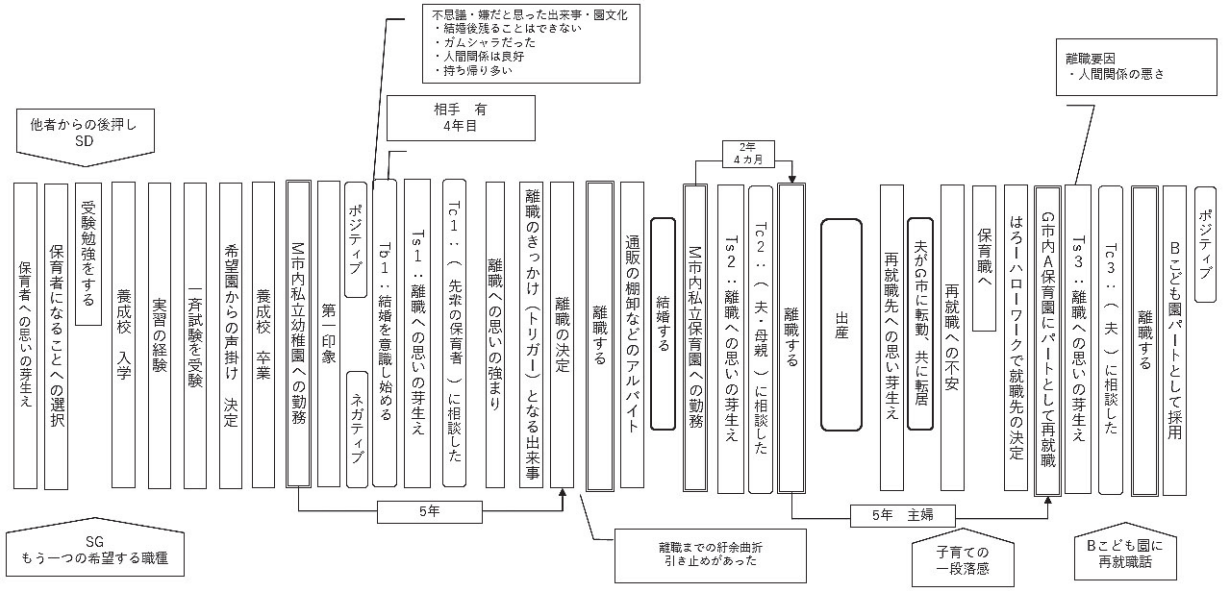


Figure 3　TEM 図保育者 B



われながらも、「結婚することへの賛同」は得られてそれによって、「離職の決定」が確実になった。そして、就職して次の年の６月には離職し、翌月に「結婚」、結婚相手の勤務先であるＤ市に転居することとなった。

【保育者Ｂの場合】

保育者Ｂは、地元Ｍ市の養成校を卒業し、「Ｍ市内の私立幼稚園への勤務」を始める。勤務がはじまると持ち帰りなどで仕事に追われる日々が続くが、それをネガティブに捉えているわけではなく、むしろがむしゃらにそれらをこなすことによって自分の保育者としての効力感を高めていった。他の同僚の保育者との人間関係も良好で仕事楽しみながら幼稚園教諭としてキャリアを重ねていった。しかし、５年目になると、幼稚園教諭になって１年目に出会った結婚相手と、付き合いはじめて４年目を迎えると結婚を意識し始める

ようになる。しかし、今勤務している幼稚園では「結婚すると離職する」という慣習があり、結婚後も務めている同僚は一人もいなかった。そのため、結婚を意識すると同時に「離職への思いの芽生え」が生起し、結婚と離職について「先輩保育者に相談した」。保育者Aのように違う場所に転居してしまうことではなかったために、園長からは、園に残って働きつづけるように説得されたが、結婚後はすぐに子どもが欲しかったことと、4年間働いたことで自分の中で区切りがついた感じがあったために、5年目に「離職の決定」をして「離職する」こととなった。

離職後は、結婚するまでの期間、しばらく主婦をして生活していたが、なかなか子どもができなかったために、通販のアルバイトをしていたが、その仕事が好きになれずに、結婚後に「子どもができるまで」という制約つきで「M市内の私立保育園への勤務を始める。2年目を迎えたころに子どもができたのをきっかけに「離職への思いが芽生え」、「夫と母親に相談して」、「離職する」こととなった。

保育者の結婚・子育て観と離職

保育者AとBに共通する経験として、基本的には結婚したら結婚相手の仕事に合わせて自分のキャリアを変えて、新たな社会的な状況に適応しようとする結婚・子育て観を持つ点にある。とくに、保育者Aは結婚相手の勤務地が遠くになってしまったために、自分のキャリアの継続についてはほとんど悩まずに、結婚を意識し始めてから早い段階で結婚して一緒にD市に行くことを決意している。保育者Bも5年のキャリアがあり、さらに園長に慰留されながらも、慣習に従って離職し、結婚相手との生活が安定するまでは他職種のアルバイトや保育園にパートで勤務するなど、自らのキャリアを変化させることで新たな社会的状況に適応しようとしている。

このように、結婚や出産、子育てによる社会的状況の変化に対する適応について、TEMによる分析の結果、「結婚相手の経済的安定」や「幼少期からいだく結婚・出産への思い」、「結婚相手の仕事優先」などのSGが働くことが示唆された。SDについては、何も見出されなかった。

保育者Aと保育者Bの差異が現れた離職後の子どもを出産するまでのキャリアの違いについては、生活の場が大きく変わったことが大きく影響していると考えられる。保育者Aが専業主婦に専念しているのに対して、保育者Bは5年のキャリアを生かすためにぱーとではあるが保育園に勤務している。保育者Aはこの時期に「知らない土地で生活する不安」をいだいていることが示されており、一方で、保育者Bは「子どもができるまで」と制約をつけてはいるが、自らのキャリアを生かしていることが明らかにされた。以上の点からも、保育者A・Bともに「子育てしやすい環境づくり」を強く志向していることが示唆された。

ⅱ期：子育て観とキャリア形成

【保育者Aの場合】

保育者Aは3人の子どもを産み、10年間専業主婦として子育てを行ってきた。しかし、夫との不和により「夫と別居する」という新たな状況が生じたために、実家がある「G市に転居する」こととなる。保育者Aは、別居を考え始めてから、経済的に自立するために「就職する思いが芽生える」。そして、G市に転居するとすぐに「再就職への意識が高まる」が、なかなか他職種では良い就職先が見つからず、保育職への再就職を考えるようになった。そして、病棟保育所のパートとして1年間勤務した後、現在勤める保育園にフルタイムの非正規の保育士として勤務し、その後、正規職員の保育士として勤務するようになった。

【保育者Bの場合】

保育者Bは2人の子どもを産み、5年間専業主婦として子育てを行ってきた。夫が、G県に異動することとなり、ともに引っ越してきた。その転居と子どもの小学校入学をきかっけに保育職への再就職を考えるようになり、実際にハローワークで就職活動を行い、G市内の保育園に非正規雇用の保育士として勤務することが決まった。しかし、その園では保育者同士の人間関係が悪い状況であったために、知り合いから別のこども園の求人の話を聞いて、A保育園を離職し、Bこども園に再就職した。

子育て観と再就職

保育者Aの再就職は一見、別居が大きな引き金になって再就職したと思われるが、TEM図を作成していく過程で、むしろ子育てが一段落することで夫との別居という選択肢が現れたことが明らかにされた。さらに、別居のためには経済的に自立する必要があるために再就職するという経験に至ったことが示された。

保育者Ｂについても同様で､G市への転勤だけでなく、そのタイミングで上の子どもが小学校に入学することが再就職の理由として示された。「子育ての一段落感」が保育者に再就職という径路を生起させる記号となることが共通していることがTEM図からも明らかにされた。

一方で、保育者Ｂは幼稚園教諭として５年のキャリアを肯定的に捉えていたために、再就職先として保育職を迷わず選択している点が、保育者Ａと異なる。保育者Ａは、はじめに異なる職種についても就職先を探すが、なかなか見つからず、最終的に資格を使うことを決断している。この違いは、結婚する前のキャリアが大きく影響を与えていると考えられる。保育者Ａも保育者Ｂも結婚前に勤務していた園への印象はポジティブである点は一緒であるが、保育者Ａが１年ちょっとの勤務であったのに対して、保育者Ｂは幼稚園と保育園を合わせて7年間勤務している。この間に、培った保育者効力感が保育者Ｂを保育職へと誘ったと考えられるのである。

５．総合考察

TEMによる分析の結果、（ｉ）結婚することによって生じる状況の変化に対して、自らのキャリアを変えることによって適応しようとするために「離職」が促進される。（ii）子どもがある程度大きくなって手が離れ来る際に生起する「子育ての一段落感」が「再就職」を促進させる。以上、２点が明らかにされた。そこで、本章では、この２点をもとに保育者不足の問題に対する新たな視座について検討を行う。

保育士不足を解消する２つのストラテジー

本研究の知見から、結婚を理由にして離職した保育者が、保育者として再就職するプロセスを明らかにした。その結果、保育者は自らが持つ結婚観と子育て観を優先させて、その傍で自らのキャリアを形成していることが示唆された。つまり、保育者の離職を止めるためには、結婚観や子育て観を変えるしか問題解決の糸口がないと考えられるのである。しかしながら、人の結婚観や子育て観は自分のこれまでの家庭生活の在り方に大きな影響を受けて歴史的に形成されるもので、それを養成期の短い時間で変容させることは容易ではない。そこで、本研究では、結婚観と子育て観を変容させるのではなく、むしろ結婚しても保育者が離職しなくてもよいような社会的状況をつくることの重要性を指摘したい。本研究では、結婚して家庭を安定させるために離職することが示された。つまり、結婚しても過程を安定的に生活できるような就業制度を採り入れることが重要であると考える。例えば、就業時間を自分で決められるフレックスタイムは有効であると考える。また、次に、自分の子どもを自分の勤務する園で優先的に保育ができるような就業制度も、「自分の子どもは自分で育てたい」という子育て観を持つ保育者にとって有効と考えられる。

６．課題と展望

新たな視座として、フレックスタイム制や勤務園での自分の子どもの保育などの方法を示したが、すでに取り組んでいる園はまだ少ないものの、実際に行われている園もある。しかし、シフトの煩雑さや自分の子どもへの接し方への不安など課題があることが指摘されている。今後は、このような取り組みを先進的に行っている園において保育者に聞き取りなどを行い、その問題点について明らかにし、保育士不足の問題解決のための研究を進めていきたい。

文献

保育士イラスト Copyright©「こどもや赤ちゃんのイラストわんパグ」 All Right Reserved.

中央教育審議会（2011）「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方」

峯村恒平（2017）小学校・中学校・高等学校の系統的キャリア教育に関する一考察―時代の変遷と自己の形成に焦点を当てて．人と教育．11．pp.92-96

神谷哲司（2010）保育系短期大学生の進学理由による保育者効力感の縦断的変化．保育学研究．48（2）．pp.192-201

大村壮（2011）短期大学保育系学生の志望動機資質について：入学直後の調査．常葉学園短期大学．42．pp.121-130

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（2015）TEA　理論編　複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ

（平成30年９月28日受理）